

浪川健治編

『下北・渡島と津軽海峡』（街道の日本史4）

佐藤 一義

昨年十二月、東北新幹線盛岡―八戸区間のレール締結式が新幹線二戸駅構内で行われ、二〇〇三年十二月の開業に向けて延伸工事は大詰め段階に入った。さらに八戸―新青森間でもトンネル部分を中心に工事が進められており、八戸自動車道と合わせて、青森県東部もいよいよ本格的な高速交通の時代に入ったと言える。

このような情勢の中で、『街道の日本史』第4巻として本書『下北・渡島と津軽海峡』が上梓されたことは実に意義深いものがある。なぜなら、本書は津軽海峡を挟んで、下北半島を含む青森県東部と対岸の北海道渡島半島東南部の間における「ひと・もの・情報」（『北からの日本史』第2集、三省堂、一九九〇年）の交流をテーマとしており、わたしたちにこの地域を考える重要な視点を示唆しているからである。

評者はこの地域にとりわけ詳しいわけではなく、かつては下北までを含んだ旧盛岡藩領に居住しているに過ぎない。この稿を引き受けるのは執筆した方々に失礼かとも考えたが、一般読者の読後感としてならばと考え、お引き受けした次第である。

本書は筑波大学助教授 浪川健治氏を編者とし、浪川氏に加えて八戸市美術館学芸員 山田泰子氏、青森県史編さん室非常勤嘱託員 野々宮

愛子氏、同室総括主査 工藤弘樹氏、元函館市史編さん室編集員 辻喜久子氏、上越教育大学助教授 河西英通氏、東通村総務課長 川畑修二氏が、それぞれ研究対象とする地域・時代・テーマを分担して執筆している。本書の構成および執筆担当者は次のとおりである。

I 奥州街道の北を歩く

一 奥南部・下北と渡島の地理と風土（浪川）

二 奥南部・下北と渡島を歩く（山田・浪川・野々宮）

II 下北・渡島と津軽海峡の歴史

一 北の民・海の民（浪川・工藤・山田）

二 交流のなかの民族と民衆（浪川・山田・野々宮）

三 近代化のなかの地域像（浪川・野々宮・辻・河西）

III 地域史の発見

一 地域への目・地域からの目（野々宮・浪川・山田・河西）

二 地域文化を支える（浪川・河西・山田・辻・川畑）

あとがき、参考文献、年表、図版一覧、索引

I は本書が扱う地域の概括である。第一節では函館と亀田半島を中心とする道南の東南部、津軽海峡を挟んで、下北半島と上北地方の青森県東部地域の地形や気候など地理的特徴を概観している。また第二節ではこの地域を通る五つの道筋について、実際に歩いた場合に目に映る周辺の風景を歴史的・地理的背景を踏まえて説明している。写真や地図も付けられており、簡単な旅行ガイドとして読むこともできる。

II は、三節で構成されており、この地域の歴史の変遷が述べられている。第一節では原始・古代から中世までを扱い、円筒土器と擦文土器、

東の境界と北方交易、北方の海の領主であった安藤氏、根城南部氏の勃興と三戸南部氏との抗争、道南十二館とコシヤマインの戦い、奥州仕置と津軽海峡の位置づけなどが取り上げられる。ここでは佐々木馨・小口雅史・斎藤利男・入間田宣夫・編者浪川各氏の研究成果に依拠し、それぞれの時代でこの地域に海峡を挟んだ交流圏が形成されていたことがまとめられており、近年、この地域の研究が大いに深化していることが伺える。第二節は近世の諸問題についてである。松前藩の蝦夷地交易独占、盛岡藩の田名部支配、野辺地湊と田名部湊、信仰と湯治の場であった恐山、南部九牧最大の木崎野牧、「忘れられた思想家」安藤昌益とその思想、東蝦夷地幕領化と田名部通一揆、場所請負制の成立と「松前稼」、箱館湊と六ヶ場所が取り上げられる。ここでも田名部を中心とする下北半島が常に蝦夷地の動向とかかわって動いていたことが読み取れる。第三節では、榎本武揚の「蝦夷共和国」、旧会津藩が移封されて成立した斗南藩、東北最初の洋式灯台である尻屋崎灯台、近代都市函館の成立と北洋漁業の基地としての函館、下北半島における運河開削計画、北東北から北海道の「東北十三州」連合構想、国防の要所となった津軽海峡や三沢基地、原子力半島と化した下北半島など明治維新以後から現在に至るまでの歴史的トピックスを取り上げている。

Ⅲはよりテーマ性を前面に押し出した構成である。第一節では、盛岡藩主が領内巡視した際に藩士が著した随行記『若葉の幣』、北丹交易と蝦夷錦、下北半島出身者が襲撃されたクナシリ・メナシの戦い、最上徳内や高田屋嘉兵衛、商人が台頭した城下町八戸、箱館開港にともなう西洋文化の流入、下北におけるコレラの流行について記述される。第二節

では田名部宿老が執筆・編纂した歴史書『原始漫筆風土年表』、天保飢饉における八戸藩領と盛岡藩領、西南戦争に呼応して政府転覆を計画したとされる真田太古事件、八戸の自由民権結社である暢伸社、婦人運動のさがけとして活躍した羽仁もと子や永嶋暢子、明治時代最大の労働争議である日本鉄道機関方のストライキ、人生の大きな関門でもあった津軽海峡のもつ文学性、下北半島の東通に伝わる能舞が取り上げられる。また第三節では海峡を挟む民族として下北アイヌの存在、近世から現代にいたる下北半島の地域像が再度まとめられている。

さて、ここでは本書における特筆すべき意義を考えてみたい。第一に挙げられるべきは、本書が扱う地域を含んだ青森県の歴史研究についてである。叢書『街道の日本史』は、「地域史の創造」（刊行のことば）を提唱することを目標として企画されたもので、全五六巻で構成されている。現在その第1期として二〇巻が順次刊行中であるが、本書は、青森県内を取り上げたものとしては西部地域を扱った第3巻『津軽・松前と海の道』（長谷川成一編）に次ぐ刊行である。この2冊には、現在行われている『青森県史』や『新編弘前市史』の編纂事業の過程で得られた成果が随所に盛り込まれており、本県の歴史研究および研究体制がいかに充実しているかを図らずも全国に示すこととなった。とりわけ本書は、編者自身の研究成果（浪川健治『近世日本と北方社会』、三省堂、一九九二年）によるところが大きいことは勿論のこと、「その地域で主体的に歴史に関わっておられる方々」（あとがき）によって執筆されており、より地域に密着した観点からの記述が見られる。例えば『若葉の幣』や

『原始漫筆風土年表』など、従来あまり取り上げられなかったことがない史料に焦点をあて全国に紹介した意義は大きい。本書の扱った地域は史料制約の多い地域であつたと推察されるが、それでもこれらの史料を紹介できたことにより、多くの人々がより一層地域に密着した視点から考察することが可能になったといえよう。

第二に、「近代国家の展開過程で生み出された都道府県の行政地区割は意味を持たない」（刊行のことば）とあるように、本書で扱った地域がまさに青森県という括りでは捉えきれない地域であることを如実に示したことであろう。本書の裏表紙には、本叢書の各巻名とそれぞれが担当する地域が全国的に図示されており、おおよその範囲を把握できる。

これによると、各巻の執筆範囲と現在の行政地区割とは多くの地域で一致しているとはいえない。前近代においては、山川、平地、海流、風向きなど自然の地形や現象に応じて街道（河道・海道）が開かれたはずで、このような時代には、地形や文化圏を無視した現在の人為的な行政地区割には見られない、「もの・ひと・情報」の流れに応じた一種合理的とも言える文化圏の形成があつたことがわかるのである。とりわけ青森県に関して見れば、夏泊半島から十和田湖を結ぶ線で東西に分けられ、津軽は松前と下北は渡島と組み合わせ構成されている。そこには、今日でも折に触れて語られる南部と津軽の文化圏の違いが表れているし、また津軽海峡が「もの・ひと・情報」を隔てるものではなく、むしろそれらを伝える「海道」であつたという認識が色濃く投影されているのである。

なお、やや気になった点もいくつかあつた。まず、本書で指摘された問題の多くは、確かに日本全体から見れば「北に住む人々の視座」に貫

かれてはいるが、この地域に限って言えば多くは本州下北側からの問題提起であり、北海道渡島側からの考察は少ないように思われた。また、本書は数名の執筆者で分担執筆していることから、記述内容が重複している場面が何箇所も見られた。これは、本叢書の編集方針もありやむを得ないことであつたのであろうが、例えば同じ史料の説明が何度かあるなど、もう少し整理されていてもよかつたのではないかと感じた。さらに、本叢書の目標のひとつに、「地縁的まとまりとしての地域個性・文化に照明を当て」（刊行のことば）とあるように、本書でも下北半島地域特有の文化である恐山のイタコや東通村の能舞については記述がなされたが、地名、食生活、伝統行事、生活慣習など生活者に密着した生活文化や精神文化の紹介が物足りないように思われた。

最後に、評者の個人的関心から最も注目したいことは、津軽海峡およびこの地域を特徴づける下北半島の現代的位置づけの問題である。

「中曽根首相の「下北半島を原子力のメッカとする」という発言」（盛田稔・長谷川成一編『図説青森県の歴史』、河出書房新社、一九九一年）に代表されるように、下北半島は国の原子力政策に翻弄され、その矛盾を一手に引き受ける形で核半島化してきている。これは、下北半島が現代社会における辺境としての認識から脱却できないための政策であると言えまいか。また本州から大きく突き出た地形ゆえに高速交通網から取り残される形ともなり、県としても原子力というリスクを背負う政策に活路を見出さざるを得ない状況があるようにも思われる。しかし、本書において何度も触れられているように、下北半島は、以前から北方

との豊かな交流の場であつたのであり、またかつては下北半島に運河を開削し、太平洋航路便を直接陸奥湾に引き入れて青森港を国際港湾都市として位置づけようする壮大な構想が持ち上がったこともあるという。

長引く不況、国や地方の財政難、環境保護意識の高揚などを考えれば、この構想を現実のものとするには些か無理があるものの、下北半島を単なる開発の必要な地域、取り残された辺境として見るのではなく、豊かな自然と共存できるわずかに残された地域として、あるいは太平洋と日本海、本州と北海道、ひいては極東と日本や世界を結ぶ重要な接点として捉えることに青森県の将来を方向づける重要な視点が秘められているように思われた。とすれば、地方の時代といわれて久しい今日において、下北半島の動向は日本の将来を占う試金石となりうることを本書は読者に提供したのであり、このようなダイナミックな発想力を、わたしたち地域に住む者が率先して持つことによつてのみ、「地域は国家と相対性をもつことが可能になる」(刊行のことば)と思うのである。

この点において本書の執筆にあたられた方々が本叢書のねらいを見事に具現化されたことに敬意を表し、また評者の理解不足で本書の内容や意義を十分に伝えられなかったことをお詫びしてまとめたい。

(四六判、二二〇頁、吉川弘文館、二〇〇一年七月刊、二三〇〇円)

(さとう・かずよし 岩手県立盛岡第二高等学校教諭)